

年 月 日 /

学校 年 組 番 名まえ

2025年1月6日付

箱わなと、猟友会鹿嶋支部のメンバーら＝鹿嶋市猿田



イノシシ捕獲努力続く

サツマイモや水稲など農作物を荒らすイノシシを減らそうと、猟友会関係者らの捕獲に向けた恒常的な取り組みが続いている。被害は中山間部だけでなく、平野部にも拡大。会員の高齢化も進み、後継者確保は喫緊の課題だ。県はイノシシ管理計画に基づき、市町村を被害対策地域と拡大防止地域の二つの管理区分に分けて対策を推進。捕獲の担い手確保につながるほか、生息状況を把握する情報収集などに努めている。

県内猟友会関係者ら

県も対策、課題は後継

■筑波山から

拡大防止地域の鹿嶋市の有害鳥獣捕獲件数（イノシシ）は、2022年度は27件、23年度は99件、24年度は現時点で102件と増加した。市は電気柵の設置補助や対策を学ぶ講座を実施しながら、さらなる被害防止に取り組んでいる。

同市で、イノシシの被害が初めて確認されたのは17年（被害額6万2千円）。19年には、被害額が2万5千円となった。被害の増加を受け、20年に市鳥獣被害防止対策協議会を設置。同年、市鳥獣被害対策実施隊を発足し、農業被害の対策を強化してきた。実施隊に協力する、猟友会鹿嶋支部の入江康男支部長は「イノシシが筑波山の方から南下し、徐々に鹿嶋でも増えてきた」と指摘する。

■2種類のわな

使用するわなは2種類。箱状のわなに餌のサツマイモやコメぬかを入れておびき出す「箱わな」と、太さ

4センチ以上のワイヤで足を捕らえる「くくりわな」。メンバーで交代しながら、イノシシが捕獲されていないか、鳥などに餌を食べられていないかを、毎日確認する。

見回りの時間は決まっていないが、猟友会の多くは高齢で、身体的な負担も大きい。会員らは「新しい人が増えてほしい」とするが、入江支部長は「働く若者は忙しく、わなの見回りなどを行う時間の確保が難しいだろう」と話す。

イノシシは大きいもので全長約1.8メートル、重さ約140キログラムにもなり、運搬には困難が伴う。「100キログラム以上のイノシシが、斜面でわなに」かかると大変」と入江支部長。わなにかかったイノシシがワイヤを切った突撃してくる危険性もあり、「なめてかかったら怖い。ぶつかったら大げがしてしまつ」と命懸けだ。

入江支部長は「好きて殺しているわけではない」と心情を明かす。捕獲したイノシシを駆除する時は「かわいそうだ」と悩む。しかし「イノシシの臭いが付いてしまつと（農作物が）駄目になる」との思いで、狙いを定めて撃つという。地域貢献につながると思い、活動している。理解が広が

つてくれたらうれしい」と願う。

■増える個体

県はイノシシ管理計画（22～26年度）を策定。イノシシの分布、捕獲状況、農作物被害状況などを考慮し、市町村を被害対策地域と拡大防止地域の二つの管理区分に分けている。同計画によると、24年度のイノシシの個体数の推計（中央値）は4万3557頭。26年度には4万2051頭になる見込みだ。

イノシシによる農作物被害が恒常的に続いている水戸市や日立市など16市町の被害対策地域では年間1万4千頭の捕獲を目標とし、残り28市町村の拡大防止地域では年間1100頭を目標としている。

県は、若者や農業後継者等を対象に、狩猟の魅力や狩猟免許制度を紹介するパンフレットの配布などで捕獲の担い手確保につながるほか、生息状況を把握するために猟友会等の狩猟関係者や農業関係者へイノシシの目撃状況のアンケート調査などに取り組む。

県環境政策課の担当者は「引き続き情報収集や捕獲促進などに取り組んでいく」としている。（三上山明里、川崎陸）

【問1】県はイノシシ管理計画に基づき市町村をどのように分類している？

被害対策地域16市町と拡大防止地域28市町村の2つに区分

【問2】イノシシを捕獲するわなには、どのような種類がある？

箱状のわなに餌を入れておびき出す「箱わな」とワイヤで足を捕らえる「くくりわな」

【問3】イノシシの個体数の推計は？

2024年度が4万3557頭、2026年度が4万2051頭



よ 読めない文字は、かざくや、ともだちにきいてみてね